



Title	中英語ロマンス覚書 : テイル・ライム・ロマンスを中心として
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 197-225
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中英語ロマンス覚書 —テイル・ライム・ロマンスを中心として—

田 尻 雅 士

Lytyll and mykyll, olde and yonge,
Lystenyth now to my talkynge,
Of whome Y wyll yow kythe.
(Northern *Octavian*, ll.1-3)

1.

中英語の物語詩と言われて誰しもがまず思い出すのが、「英詩の父」と呼ばれるジェフリー・チョーサーの作品であろう。大学生に聞いても、『カンタベリー物語』というタイトルぐらいは耳にしたことがある、という人が多い。彼には他にもすぐれた作品がある。チョーサーに続いて、彼の友人ジョン・ガワー作の『恋する男の告解』、無名詩人の手になるロマンスの白眉『ガウェイン卿と緑の騎士』、物語詩とは呼びにくいがウィリアム・ラングランドの『農夫ピアズの夢』などが文学史に登場する常連と言ってよいだろう。これらはチョーサーが活躍したのとほぼ同時期、14世紀後半に花開いた中世英文学の粹である。チョーサーとガワーはロンドンの人間で、彼らの作品はフランス風に行末が韻を踏む形式、つまり脚韻詩である。一方、『ガウェイン』や『ピアズ』は古英語以来の、行中の数語の語頭が同音となる頭韻詩で、イングランド西部の伝統に属する。15世紀にはトマス・マロリー卿が当時のアーサー王伝説を集大成して『アーサーの死』を書いたが、これは散文であった。

さて、私がここ数年、主に関心を持って考察してきた諸作品は、上記のいずれでもない。14、15世紀にイングランド中東部、東ミッドランドを中心に隆盛した tail-rhyme romances と呼ばれる作品群である。テイル・ライムは尾韻と訳されることもあるが、定着しているとは言えない。この詩型は脚韻の一種であるが、主として12行からなるスタンザ(連)を一つの単位とし、それぞれのスタンザが概ね aabccbddbeeb と押韻する。同じアルファベットで表された行の末尾が韻を踏むという意味で、a, c, d, e の各二行は8音節、b で表された行はテイル・ラインと呼ばれ、6音節からなる。以上はあくまでも標準的な型であって、いろいろなヴァリエーションが存在する。6行や16行を一スタンザとするものもある。また、この詩型はロマンスに限られたものでもなく、聖者伝などのジャンルにも見られることを心に留めておきたい。標準的なタイプのスタンザを、あるロマンス作品の冒頭から紹介しよう—

Jesu that ys kyng in trone,
As thou shoope bothe sonne and mone,
And all shall dele and dyghte,
Now lene us grace such dedus to done,
In thy blys that we may wone:
Men calle hyt heven lyghte;
And thy modur Mary, hevyn qwene,
Bere our arunde so bytwene
(That semely ys of syghte)
To thy sone that ys so fre,
In heven wyth Hym that we may be,
That lord ys most of myghte.
(*Emaré*, II.1-12)

ロマンスの出だしによく見られる、イエスと聖母マリアへの祈願である。

(引用はMills (1973)による。)ここでインデントされている行がテイル・ラインであり、情報量をあまり持たない定型的な表現が頻出するとされる。9行目の聖母を形容する「見目麗しい」や、12行目のイエスの形容「力溢れる主であられる」などは、こう言っては中世の作者・聴衆には不敬と聞こえるかもしれないが、埋め草とでも言うべきものである。

12行からなるテイル・ライム型式で書かれたロマンスには、年代順に次のようなものがある。(Fein (1997) p.373による。)

1225-1300: *Amis and Amiloun, Guy of Warwick*

1300-1350: *Sir Isumbras, The King of Tars, Horn Child, Otuel and Roland, Roland and Vernagu, Libeaus Desconus, Sir Eglamour of Artois, Northern Octavian*

1350-1400: *Athelston, Le Bone Florence of Rome, Sir Cleges, Ipomadon, Sir Triamour, Sir Amadace, Sir Launfal, The Sege of Melayne, Duke Roland and Sir Otuel of Spain, Emaré, Sir Gowther, The Erl of Toulous, Sir Torrent of Portyngale, Syre Gawene and the Carle of Carelyle*

以上24作品であるが、「ロマンス」というジャンルの定義の仕方や、ある作品(例えば*Guy of Warwick*)の異なったヴァージョンをそれぞれ独立した作品と見るかどうかなどによって、数字は変わってくる可能性がある。(本稿では深入りしないが、ロマンスの定義というか一般的の傾向としては、「高貴で有徳の主人公が試練を経て幸福を得る。そして結末は、多くの場合、主人公の恋愛の成就や配偶者との再会を伴う」くらいに私は考えている。)また、成立年代は主に14世紀であるが、今日伝えられる写本は15世紀のものであることが多い。

これらのロマンスを収めた写本で特に重要なものが四つある。これも成立年代順に列挙してみる。年代のあとの地名は制作されたと考えられる地方、かっこ内は収録する12行テイル・ライム・ロマンスである。(Guddat-Figge (1976) などによる。)

Edinburgh, National Library of Scotland MS. Advocates 19.2.1 ('Auchinleck MS')

1330-40年; London

(*The King of Tars, Amis and Amiloun, Guy of Warwick, Roland and Vernagu, Horn Child*)

Lincoln Cathedral Library MS. 91 ('Lincoln Thornton MS')

1430-50年; North Yorkshire

(*Northern Octavian, Sir Isumbras, The Erl of Toulous, Sir Eglamour of Artois*;
この写本は16行テイル・ライム・ロマンスの *Sir Degrevant* と *Sir Perceval of Galles* も収める)

London, British Library Cotton Caligula A.ii

1446-60年; South East or Southeast Midlands

(*Sir Eglamour of Artois, Sir Launfal, Libeaus Desconus, Emaré, Sir Isumbras*;
これには6行スタンザの *Southern Octavian* も収められている)

Cambridge University Library Ff.2.38

15世紀末もしくは16世紀初頭; Leicestershire

(*The Erl of Toulous, Sir Eglamour of Artois, Sir Triamour, Northern Octavian, Le Bone Florence of Rome*)

さらに、これらよりはやや重要性は落ちるが、見逃せないのが次のものである。

Oxford, Bodleian Library MS. Ashmole 61

15世紀末; Leicestershire

(*Sir Isumbras, The Erl of Toulous, Libeaus Desconus, Sir Cleges*)

これら五写本の内、後出の Trounce によってティル・ライム・ロマンスの ‘fountainhead’ と呼ばれた作品群を収める Auchinleck MS、さらに Lincoln Thornton MS は、従来からよく研究されてきたと言える。残りの三写本についても近年、研究が進んでいる。また、これらの写本だけに限ってみても、*Isumbras, Toulous, Eglamour* などは、その内三つの写本に収められており、当時の流布ぶりが偲ばれる。一方、*Launfal, Emaré, Florence* などは一写本にしか入っていないが、写本には当然、今日伝わっていないものもあったであろうから、これを以て *Isumbras* などより人気が劣っていたとは言い切れない。こういった写本は後期中世の比較的裕福な家が所有していたと推測され、当時のミドル・クラスの市民の嗜好が窺われる。もちろん、これらのロマンスをもっぱら耳を頬りに楽しむ文盲の庶民もいたはずで、ロマンスの読者・聴衆の階層はかなり多岐に渡っていたのではないかと思われる。

ティル・ライム・ロマンスには大雑把に分けて、三つのグループがあるようである。第一は騎士の冒険や武者修行が作品の重要なプロットになっているもの、第二は受難の主人公の救済を基調とする宗教性の強い作品群、第三は一と二の混合タイプとでも言うべきものである。純粹に第一、第二のグループのみに属する作品は多くはないから、実際には第三のグループがかなりの割合を占めるであろうが。このグルーピングを成立年代の観点から見ると、第一グループは比較的初期の作品で、*Guy of Warwick* や *Libeaus Desconus* がこれにあたる。時代が下るにつれて第二グループが主流をなすようになる。Auchinleck MS 以外の、15世紀の四写本の中核をなす作品がこれらである。また、中英語ロマンスをジャンル別に分類する際に、有徳の主人公の受難と救済を主題とした作品群を ‘Eustace-Constance-Florence-Griselda’ legends の名の下に一括りにすることがある。作品名で言うと、*Sir Isumbras, Sir Eglamour of Artois, Sir Torrent of Portyngale, Octavian, Sir Triamour, The King of Tars, Le Bone Florence of Rome* の七作品で、すべてティル・ライム型式である。つまり、これらはほぼ第二グループにあたる。ただし、*Eglamour* や *Torrent* などはヒーローの武者修行ぶりも大きなウェイトを占めるので、第

三グループと言ってよいだろう。14世紀末ないし15世紀初頭に書かれた *Torrent* に至っては、くどいまでにヒーローの「活躍」が敷衍されている。テイル・ライム・ロマンスもようやくその終焉を迎える、作風はあざといばかりのデカダンに走っていった、と言えば言い過ぎだろうか。

後でまた触れることになるが、中英語ロマンスの今一つのジャンルとして ブレトン・レイ一ブルターニュ短詩一と呼ばれるものがあり、ケルト人の地 ブルターニュ地方に伝わる妖精譚を翻案した、またそうであると称される一群の作品である。詩型の点では、カプレット(二行連句)のものが五作品、テイル・ライムのものが四作品ある。後者には *Sir Launfal*, *Emaré*, *The Erl of Toulous*, *Sir Gowther* があり、内 *Launfal* はどちらかと言えば第一のグループ、 *Emaré* と *Toulous* は第二のグループに属すると言える。特に *Emaré* は *Florence* などと同様、流謫の貴婦人を扱ったもので、‘Eustace-Constance-Florence-Griselda’ legends に分類されることもある。*Gowther* は、これも後述するが、悪魔の申し子の改心を扱った独特のプロットを持ち、グループ分けはしにくい。テイル・ライム・ロマンスの中で私が主に関心を持ち続けてきたものは、実は、これら‘Eustace-Constance-Florence-Griselda’ legends とテイル・ライム型式で書かれたブレトン・レイである。お話の趣向は様々だが、おおむね didactic、つまり多かれ少なかれ聴衆の教化を目的とした作品群である。

2.

次に、テイル・ライム・ロマンスについて何らかの言及のある、私にとって大事と思われる研究をほぼ年代順に取り上げる。もっとも、テイル・ライム・ロマンスのみを扱っている研究はむしろ少数で、中英語ロマンスの一部として考察しているものがほとんどである。さらにこの中には、テイル・ライム・ロマンスについて述べていても、それらを何らかの共通性を持ったユニティーとして捉えることに抵抗を示している研究者もいることに留意したい。まず海外の研究動向を、次に日本の研究者の仕事を紹介し、面映いが私

の若干の論考についても述べさせていただく。これらはまったく私自身のための覚書であり、もとより網羅的であるはずもなく、遺漏は避けがたいことをあらかじめお断りしておく。

テイル・ライム詩型に関する初期の研究として第一に挙げるべきものに Strong (1907) がある。ラテン語、フランス語、英語の各言語におけるこの詩型について詳細な調査をしている。フランス語のテイル・ライム詩型、*rime couée*はラテン語の *versus tripertiti caudati* から発展したものであるが、フランス語の場合、他の行より音節数の少ない *b-line* を他の行と同じ長さにしてしまったのに、英語では短いまま保たれたこと、さらにフランス語では短い叙事詩などに使われたこの詩型が英語では物語詩に適用されたこと、が述べられている。次に、Hibbard の手になる 1924 年初刊の *Mediaeval Romance in England* は、もちろんテイル・ライム・ロマンスに限定したものではないが、中英語ロマンスを網羅的に詳述した文献として今日でも有益である。また、彼女(後、姓が変わり Loomis)には *Auchinleck MS* についての画期的な二つの論考(1940), (1942) もあり、うち 1940 年論文は Chaucer がこの写本に接して、その中のテイル・ライム・ロマンス *Guy of Warwick* などの表現を、彼のロマンスのパロディー ‘The Tale of Sir Thopas’ で用いた可能性を指摘したものである。

テイル・ライム・ロマンスを、初めて一つのユニティーととらえて包括的に研究したのは *Athelston* の編者でもあった Trounce である。彼は 1932 年から 1934 年にかけて *Medium Ævum* 誌に論文を分載したが、その分量は優にモノグラフに匹敵する。彼の言説は、後述するように、少なからぬ部分において今日的価値を失っているが、当否は措いても次の二文は引用に値するだろう：

[The tail-rhyme romances] constitute one of the three broad streams of poetical narrative literature of the fourteenth century in England, the other two being what we may designate as the ‘French School’ of Chaucer and

Gower, and the 'West Midland' of the 'Gawayne' poems and *Piers Plowman*. These two last-named 'schools' have received their due of study and eulogy, but the third 'school'—of the tail-rhyme romances—has been either neglected or despised. (1932年論文 p.87)

さらに Trounce はこう続ける：

...let me state here my opinion that this body of poems—the East-Midland—represents a 'school' as definite as that of the West-Midlands; that it evolved a poetic manner capable of great power and variety of expression, and achieved some very notable passages...; that it has more authentic echoes of the Germanic epic feeling than any other poetry of the fourteenth century; and, finally, that the style can be located with certainty, and can be shown to be characteristic of the area in which it was developed. (同 pp.88-89)

ここで彼が想定している地域とは、東ミッドランドでも特にイースト・イングリア地方である。それにしても、随分な持ち上げようである。ティル・ライム・ロマンスが英文学史上でもパッとしたのは、まさに Chaucer, Gower, Langland, *Gawain*詩人の作品に伍するようなものがない、と諸家が考えてきたからであって、その見解は現在に至るまで大きな修正は加えられていないのであるが。とはいって、この時代に、マージナルな一群の文学作品を称揚した貢献は貴重であると思うし、私自身も大いに啓発されたことを認めるにやぶさかではない。

Trounce の研究には、かなり早い時点から異論が出た。Taylor (1935) は、ティル・ライム・ロマンスが多くはイースト・イングリアの産であるという見解に疑問を投げかけた。その後の研究者の調査でも、これらのロマンスのかなりの部分はイースト・イングリアよりはさらに北の北東ミッドランド地

方で書かれたものである、とする説が有力である。さらに Dunlap (1941) は、Trounce の説を念頭に置いていた訳ではないかもしれないが、テイル・ライム・ロマンスの語彙を調査し、「ごく一部を除き、これらのロマンスの語彙は、他の中英語作品の語彙とさほど変わることはない」(p.36) と結論している。間接的批判とはいえ、Trounce の説は旗色が悪くなつたことになる。

現代の英米の中世英文学界を代表する碩学の一人、Derek Pearsall は少しばかり Trounce に同情的である。1965年の論文ではこう述べている。

This division [between the romances in four-stress couplet and those in tail-rhyme] is obvious enough, but it is a very real one, for it corresponds to a more fundamental division between 'epic romance' and 'lyric romance', the former more prosaic, realistic, historical and martial, the latter more emotive, more concerned with love, faith, constancy and the marvellous. (p.96)

Trounce はテイル・ライム・ロマンスの方を評して、Germanic epic feeling を留める、と述べたことは先に引用した。Pearsall は逆に、epic romance をカプレット詩型のものとし、tail-rhyme romance を叙情的としている。これは Trounce が比較的初期の、私が第一グループと呼ぶ一連の作品を念頭に置いているのに対し、Pearsall はどちらかと言えば第二グループの宗教色の濃い作品を意識しているからかもしれない。ともあれ、Trounce に味方が現れたといえる。しかし、McSparran は、彼女らが編集した CUL MS Ff.2.38 のファクシミリ (1979) のイントロダクションで、同一の写本の中でカプレット・ロマンスとテイル・ライム・ロマンスが特に区別なく並列されている事実を指摘し、Pearsall の見解を批判している。Pearsall 自身も 1977 年の著書の中では、

The formal identity of the English romances is...striking. Apart from [a] few exceptions..., all are written either in the short couplet or in tail-

rhyme..., the latter in particular forming a strongly marked group—though not so strongly marked that they can be assigned *in toto* to a single regional ‘school’. (p.148)

と述べ、Trounce の説を意識しつつ、1965年の見解をややトーンダウンさせている。

Trounce の言説を巡る様々な見解はひとまず撇く。ティル・ライム・ロマンスに限らず、中英語ロマンス全般について、ここ40年近く精力的に取り組んできた英國の学者に Maldwyn Mills がいる。ロマンス作品の編者としても評価が高いが、特に1973年初刊のエブリマン叢書中の一巻などは、一般にはなじみの薄い作品をポピュラライズしたものであり、貴重な貢献である。彼の1994年論文は、*Sir Isumbras* の諸写本に見られるスタイルの異同を考察したものである。ティル・ライム・スタンザの型式として当初6行スタンザが見られたが、その後12行スタンザに取って代わられ、16世紀中葉には再び6行スタンザが登場した、と論じる。また、Mills には *Horn Child* のユニークな朗読テープ(1990)があり、飘々とした味わいは一聴に値する。ところで私はあるイギリスでの学会で Mills 氏にお目にかかる機会があったので、先程の Trounce の見解について氏の意見を質したところ、前段で最後に引用した Pearsall の見解とほぼ同様の、中庸を得た答が返ってきた。

Mills のスタイルの研究について触れたので、その他の研究者によるティル・ライム・ロマンスの文体研究についても述べておく。Andersen は、その学位論文(1968)で *Ipomadon* のエディションを作ったが、イントロダクションの中でティル・ライム・ロマンスの文体に触れている。Dürmüller のモノグラフ(1975)は、*The Erl of Toulous*を中心とする後期ティル・ライム・ロマンスのスタイルを詳述したものである。Trounce 程まではいかないにしても、ティル・ライム・ロマンスを復権させようという意欲を強く感じさせる。とは言うものの、*Toulous* のスタイルを随分高く評価したかと思うと、例えば *Emaré* には厳しい評価を与えている。正直言って、私にはそれ程顕著な差は

認めがたいのだが。この書に対するMillsの書評(1978)はかなり手厳しいものであった。Hilligossの学位論文(1977)は二部構成となっており、第一部ではティル・ライム・ロマンスのいわゆる狭義の文体を扱い、第二部では*Guy of Warwick, Octavian, Sir Isumbras, Amis and Amiloun*といった作品のthematicな問題を論じている。Fewsterのモノグラフ(1987)は、*Amis and Amiloun, Guy of Warwick*およびカプレット・ロマンスの*The Squyr of Lowe Degre*の間のintertextualityを扱ったものである。

ティル・ライム、カプレットを問わず、ロマンスはどのようなオーディエンスを対象としたか、という問題は近年とみに取り上げられることが多い。Guddat-Figgeの手になるロマンスの写本カタログ(1976)のイントロダクションに収められた論考、写本の ownershipから聴衆・読者層を探ろうとするHudsonの論文(1984)、この問題に関して性急な結論を出す傾向を戒めるPearsall(1985)、Northern *Octavian*の聴衆に関して一部の研究者が主張する‘a popular/low-bourgeois audience’説に異議を唱えるSimons(1991)などは、そのほんの一例である。

口誦定型理論—oral formulaic theory—が中世英文学研究から遠のいてかなり久しい。1950-60年代あたりには、古英語詩、ひいては中英語詩研究に画期的観点をもたらすと信じられたこの理論であったが、その後、中世英語詩は基本的に書記詩であるという認識が強まり、この理論を口にする人はめっきり減った。もっとも、口誦定型理論は元来アメリカで勃興したアプローチであり、イギリスでは、はなからあまり相手にされていなかったくらいがあるが。この手法、ないしそれに類似するアプローチを中英語ロマンスに適用した事例は多くはないが、いくつか挙げてみよう。まずBaugh(1959),(1967)は今でもよく引き合いに出される論文である。彼は、限定付きながら、ロマンスが制作され、朗誦される過程でoral transmissionが関与した可能性を論じている。比較的最近の論考では、Reichl(1991)が「ロマンス、特にティル・ライム・ロマンスのような民衆的作品が、単に書かれ、暗唱されたに過ぎない、と考えるほうがおかしい」(p.262)と述べ、oral compositionの可能

性を強く示唆している。Albert Bates Lord Studies in Oral Traditionシリーズに収められたAmodio編の一巻(1994)は中英語ロマンスに関連する論考を数点収める。これを見る限りアメリカの学風は健在と言える。私は、使える方法論は何でも使ったらいよいと思う。私自身も口誦定型理論には関心があり、後述するように論考に援用したこともある。注意すべき点としては、見かけの口誦詩的ありようにあまり惑わされないことであろう。そのためには当時の社会的コンテクスト—例えば、吟遊詩人と呼ばれる人々がロマンスの制作・伝播にどの程度関与する余地があったのか、といった点—をもよく考えてみる必要がある。しかし、仮に中英語ロマンスが口誦詩もどきにすぎなかつたとしても、それが口誦詩の悠久の伝統を引きずる、もしくは引きずろうとしているものである以上、この理論を適用する余地は未だ少なくない、と思うのである。

以上見てきた研究は、Trounceに見られるような強烈な思い入れは例外的であるにしても、(ティル・ライム・)ロマンスに対するなにがしかの愛着、関心をもって物されたものがほとんどである。それに比べてKane(1951)は、ティル・ライムのものを含むほとんどすべてのロマンスを取り上げて、一貫してきわめて厳格な批評態度でそれらに臨み、多くの作品を駄作として切り捨てている。もちろん、カプレット・ロマンスの*Sir Orfeo*など高く評価されている作品もあるけれども、これは数少ない例外である。私は彼の本を読んでいて、そんなにつまらぬ作品なら一々紙幅を割かなくても、と思うことも一再ならずあった。もっとも、彼は一刀両断に切り捨てているようで、「駄作」の中でも良いと思うところは良い、とズバリと言ってのける気持ちよさがある。ティル・ライム・ロマンスいや中英語ロマンスにあって、作者の名がはっきりわかっているおそらく唯一の作品が、Thomas Chestre作*Sir Launfal*である。Marie de Franceの*Lanval*の中英語翻案版でカプレット・ロマンスの*Sir Landeval*を、他の作品も援用して敷衍したティル・ライムの作品である。Spearingはその論文(1990)の中で、これをかなり手厳しく評している。例えば、'Where *Sir Landeval* is Chestre's source, a normal pattern is for his

couples to be reproduced as the long lines of a stanza, while the tail lines are additions—additions of words but not of sense, both because there is nothing that needs adding and because in any case only an exceptionally gifted poet would be able to add apt meaning in the form of isolated short lines' (p.149) とあり、これはテイル・ライム・ロマンスそのものが持つ内在的な欠陥の指摘とも言える。先に見たように、フランスの詩ではテイル・ラインを長行化した、という事実が思い出されるのである。もっとも、Spearingは同じページで、'To make such criticisms is not to judge a formulaic style by inappropriate standards; it is to suggest that Chestre was an incompetent user of such a style' とフォローしてはいる。しかし、competent users of such a style はそう多くはないことを、Spearingはよく知っているはずである。

1990年代に入って、中英語ロマンスの研究人口は、(私達の謙虚な尺度での話ではあるが)増えてきたように思われる。手頃なロマンスの選集などもいくつか出版された。ただ、個々の作品研究は別として、一つのまとまりとしてのテイル・ライム・ロマンスに焦点を絞った論考は特にないようである。ここ三年ばかりの間に管見に入った、部分的にせよテイル・ライム・ロマンスを扱った四つの論考を紹介する。Fein (1997) はロマンスの研究ではなく、中英語の12行スタンザ型式全般を扱ったものであり、主たる関心は *Pearl*に見られるスタンザの成立の過程である。結論としては、12行テイル・ライム・スタンザと *Pearl*のスタンザには特に関連性は見いだしえない、ということのようである。フェミニズム批評、女性論は、中世英文学の世界でも近年大いに話題を提供しているが、ロマンス研究も例外ではない。Vandelindeの聖者伝的ロマンスに関する学位論文(1995)が扱っているのは、ほとんど(その意図はなくとも)テイル・ライム・ロマンスである。また、この論文は女性像にのみ焦点をあてている訳でもないが、第4章での *The King of Tars, Le Bone Florence of Rome, Emaré*の各ヒロインの比較は興味深く、ロマンスの登場人物を極度に類型化して捉える弊をいましめられたように感じた。と同時に、「深読みかな、これは」という印象も持った。Osbornのモノ

グラフ (1998) は、*Emaré, Le Bone Florence of Rome* を含む ‘castaway queens’ の物語を神話学的アプローチで読み解いた、かなり気宇壯大な研究である。一言でいえば、これらのヒロインたちには聖母マリア、さらにそれ以前の異教の女神たちのイメージが投影されている、というのが彼女の論旨である。こういった研究はともすれば大風呂敷になりがちだが、割と無理なく読めた。どちらかと言えば理よりも情に訴えた本であるけれども、それも悪くないと思う。また、民族学的、神話学的、考古学的オーラを漂わせた本書は、アメリカ人研究者が好み、イギリス人研究者が眉に唾するような類の本かもしれない。ティル・ライム・ロマンスのみに関する研究ではないが、Adams (1998) は私には「目からウロコ」論文であった。韻文ロマンスは、書かれた当初からアンビバレントな評価を受けがちなジャンルであったが、写本の中で聖者伝など宗教的作品と抱き合わせになっていることによって、ある種の respectability を保っていた。しかし印刷術の発達により、これらロマンスがマニユスクリプト・コンテクストから切り離され、ロマンス集として売られるようになると、その評価は低下し衰退していった、と論じる。マニユスクリプト・コンテクストは、昨今、中世英文学では欠かせない概念であるが、この切り込み方は新鮮であった。

海外の研究動向紹介の最後に、論考から離れて、ファクシミリと研究ツールについて一言述べておきたい。写本研究の重要性が呼ばれるようになるにしたがい、各種の写本ファクシミリが刊行されるようになった。ロマンスについて言えば、前節で挙げた写本のうち、Auchinleck, Lincoln Thornton, CUL Ff.2.38 の三つはファクシミリが出ており、編者はそれぞれ Pearsall & Cunningham (1977), Brewer & Owen (1977), McSparran & Robinson (1979) である。編者による写本の解説も有益この上ない。他の二つの写本、少なくとも BL Cotton Caligula A.ii のファクシミリも欲しいところだが、目下のところはマイクロフィルムで間に合わせるしかない。次に、ロマンスが収められたマニユスクリプトのコンテクストを知る際に重宝なのが、前出のGuddat-Figgeのカタログ (1976) である。訂正すべき箇所もあるが、さしあたり研究

のとっかかりの段階では大変貴重な情報を提供してくれる。コンピューター技術の発達により、昔の研究者が一生かかっても作れなかつたようなコンコーダンスの制作が可能になった。作品の語学的研究をする際は言うまでもなく、翻訳する場合などにも威力を発揮してくれる。テイル・ライム・ロマンスをはじめとするロマンスのコンコーダンスとしては、Saito & Imai (1988), Reichl & Sauer (1993) がある。前者は‘The Matter of England’, ‘The Breton Lays’と二巻構成になっており、後者も同じく二巻本だが、テイル・ライム・ロマンスのみを扱う。最後に、Severs編のマニュアル(1967)は中英語のすべてのロマンスの背景知識と梗概が収められており、手放せない。これは書誌目録も兼ねるが、より新しい文献情報を知るには Rice (1987) がある。こちらは1955年から1985年までに世に出たロマンス研究を、簡単な梗概とともに網羅してくれている。各ロマンスのエディションについては1954年以前のものも掲載しているので重宝である。とはいえ、これも出版以来10年以上経ってしまった。続編が待たれる。

日本の中世英語英文学研究者によるロマンス研究も近年盛んになってきたが、ここでは、テイル・ライム・ロマンスを主に扱ったもの、もしくは詩型の差異を念頭において書かれた論考のみをとり上げる。遺漏はお許しいただきたい。日本の学界で、中英語ロマンスというジャンルを初めて本格的に論じた研究者は、名著『中世の英文学と英語』(1951)の著者でもある故・厨川文夫博士であろう。1962年、「英語青年」誌に連載された「Chaucer と方言文学」、1963年の「Sir Launfal の成立—比較文学的考察」などは今でも価値を失っていない重要な貢献である。前者は、ロンドンで大作を物したチョーサーが、いかに当時の地方文学である西ミッドランド地方の頭韻ロマンスや東ミッドランド地方のテイル・ライム・ロマンスの影響を受けていたか、を論じたもの。チョーサーを学ぶ者は、その周辺の作品にも配慮しなくてはならない。同時に、ロマンスを研究する者も、この大詩人のことは常に念頭におかねばならないのである。後者の論考は、Marie de France の*Lanval*や、

その英語版ともいえるカプレット・ロマンスの *Sir Landevale*を基に、Thomas Chestreがいかに *Sir Launfal*を仕立て上げたか考察したもの。前二者と比べて、*Launfal*の作風の庶民性が強調される。この論文などは英語で書かれててもよかったです。また、厨川氏のほとんどの著作は安東伸介、他・編『厨川文夫著作集』(1981)に収められており、この碩学の労作をまとめて読むことができるのではないか。(海外の研究紹介に戻ってしまうが、チョーサーとチェスターが出たついでに、この両者をめぐる Blissの論文(1958)について一言しておく。ティル・ライム・ロマンスについての優れた解説を含む *Sir Launfal*の刊本(1960)の編者でもある Blissであるが、この論文では、チョーサーとチェスターが実は友人であり、*Launfal*についてのほのめかしもあるチョーサーのティル・ライム・ロマンスのパロディー‘Sir Thopas’は、二人の間の私的なジョークであったかもしれない、という可能性を示唆する。もっとも、これは著者自身がタイトルで自認しているように speculationである。)

岩崎春雄氏の「チョーサーとティル・ライム・ロマンス」(1965)は、厨川氏の「Chaucer と方言文学」の一部を表現の観点から裏付けたものである。チョーサーはティル・ライム・ロマンス特有の表現を初期の作品では比較的無批判に用いたが、『カンタベリー物語』では一ひねりさせて用いている、と論じる。池上忠弘氏の『ガウェインとアーサー王伝説』(1988)は氏の永年にわたる研究を、アーサー王ロマンスを中心にまとめたものであるが、就中、「14世紀文学地図」(初出1968年)は大変有益である。14世紀の中英語ロマンスを、制作年代、方言、詩型の観点から分類し一覧に供したものである。同書にはティル・ライム・ロマンスをめぐる論考、「Sir Eglamour of Artas の ‘Sens’」(初出1974年)も収められている。厨川文夫博士の学統に連なる上記二氏に対し、チョーサーの脚韻語研究で令名の高い故・舛井迪夫博士に学んだ下笠徳次氏はロマンスの脚韻語を調査しているが、‘Rhyme Phrases in Tail-Rhyme Romances’(1991)は特にティル・ライム・ロマンスにしぼったものである。チョーサーによる、ロマンスのライム・フレーズの批判的受容につ

いても述べられている。私も途中から参加した中世英國ロマンス研究会は、1983年以来、三巻の『中世英國ロマンス集』を出版し、20作のロマンスの翻訳を世に問うてきた。ティル・ライム・ロマンスだけに限っても、第一集で、*Athelston*, 第二集(1986)で、*Sir Launfal, The Erl of Toulous, Emaré, Sir Gowther*, 第三集(1993)で、*Sir Cleges, King Edward and the Shepherd, Octavian, Sir Isumbras, Sir Amadace* の計10作品が訳されている。*(King Edward and the Shepherd)*は第一節で掲げたティル・ライム・ロマンスのリストからは外されている。ジャンル分け上の問題である。)このシリーズは続刊も予定されている。また、この会の会員諸氏は、翻訳以外でもロマンスをめぐる様々な研究を続けていることを付け加えておく。

ここ十年ばかり、私も、時々脇道にそれながらも、ティル・ライム・ロマンスについて勉強してきた。自身の心覚えを兼ねて、拙稿を簡単に紹介しておく。1987年、1991年論文は口誦定型理論に想を得たもので、古英語詩などゲルマン詩に頻出されるとされる「浜辺に立つ英雄」の主題がティル・ライム・ロマンスの内、*Octavian, Sir Isumbras, Sir Eglamour of Artois, Sir Torrent of Portyngale, Emaré, Le Bone Florence of Rome*に見られることを論じた。*Emaré*は厳密には「ブレトン・レイ」に分類されるものの、これら6作品はそのプロットからして前出の「ユースタス・コンスタンス・フローレンス・グリゼルダ伝説」に属すると考えてよい。反省してみると、この論文には少なからぬ附会がある。また、この「発見」をもって、Trounce がティル・ライム・ロマンスの特徴であると言う ‘Germanic epic feeling’ の証左としたのだが、これは勇み足であった。まず、Trounce の言う ‘epic feeling’ というのもティル・ライム・ロマンスに限定してよいものか疑問が残るし、一方、「浜辺に立つ英雄」主題はゲルマン詩以外にもありそだからである。とはいって、地中海沿岸地方を舞台とすることの多いこれらのロマンスに、この主題がかなり明確な形で残っていることは示唆したのではないかと思う。この主題は、浜辺など境界的状況—liminality—に置かれる主人公を描くものであり、その変異形も含めると、人類に普遍のものではないかと思われる。

1995年に発表した二点の論考は、ともに中英語のブレトン・レイを扱ったものである。‘Middle English “Breton Lays”—Two Traditions’では、ブレトン・レイと総称されても、カプレット型式で書かれた *Sir Landeveale, Lay le Freine, Sir Orfeo, Sir Degaré, ‘The Franklin’s Tale’* と、ティル・ライム・スタンザ型式で書かれた *Sir Launfal, Emaré, The Erl of Toulous, Sir Gowther* は異なる文学的風土に属することを、諸家の見解も踏まえて述べた。前者が妖精を登場させたり、ブルターニュを舞台にしているなど、多少なりとも純粹な意味でのブレトン・レイと呼べるのに対し、後者はブレトン・レイとは名ばかりの作品群で、合戦シーンが多く、ケルト圏以外のヨーロッパ大陸が舞台になっているなど、ティル・ライム・ロマンス全般に見られる特徴を共有しているのである。‘“So well y schall the saue”—A Study of the ME Tail-Rhyme “Breton Lays”’の方は‘Two Traditions’の続編で、ティル・ライム型式のブレトン・レイには、「善は報われ、悪は滅びる」という因果応報的倫理観と、ヒーローを守護するような母神的女性が登場することを述べた。母神的なヒロインには、聖母マリアや、それ以前の異教の女神のイメージが投影されているのかも、とも書いたが、これは少々大風呂敷であったかもしれない。ところが最近、前述のOsbornの著書が出て、驚いたり意を強くしたりしているところである。

1998年論文は、*Sir Gowther* の前半部分に、経外典福音書の影響が見られることを論じたものである。これは元来 M.B. Ogle という人が唱えた説であったが、その後顧みられることは少なかった。しかし、中世ヨーロッパにおいて聖家族とりわけ聖母子崇敬が篤かった事実を踏まえると、経外典福音書のロマンスへの影響は、オーグルが説く以上に顕著なのではないかと考えられる。その影響は、例えば、マリアの両親ヨアキムとアンナにまつわるエピソード、マリアへの受胎告知、幼児イエスに授乳する聖母などの「パロディー」という形で現れている。ゴウサーは経外典に描かれる少年期のイエスを奇妙に髣髴させる「反キリスト」として生まれ、長じては結局、その憎むべきイエスに倣い、聖人として生涯を終えるのである。

近刊の‘Romance, Wall Paintings and Vault Bosses: *Le Bone Florence of Rome in Context*’は、*Florence*と、*Gesta Romanorum* 中のその類話、中英語の聖母奇蹟譚、さらに同じ題材を扱ったイートン校礼拝堂の壁画とノリッジ大聖堂内ボーチャン礼拝堂のボス(アーチ型天井浮き出し飾り)を比較検討したものである。この論文を執筆するきっかけとなったのは、1996年夏にイートン校を見学した際のガイドの説明で、*Florence*と壁画の話が酷似しているのに気づいたことである。その後、ノリッジ大聖堂のボスも類似の話を扱っていることを知り、ロマンスとこれらの視覚芸術に何らかの接点が見出せないか、と考えたのである。結局、直接的な関係を実証するような事実は何も見つからなかったが、マリア崇敬という当時のフィーバーを軸にして考えると、これらは意外にも近似したメンタリティーを共有していることがわかった。今一つの近刊論文、‘*Sir Orfeo* in MS Ashmole 61: One Foot in the Tail-rhyme World?’は、三写本で伝わる *Sir Orfeo* の内、Ashmole 写本のヴァージョンを扱ったものである。*Orfeo* はもちろんテイル・ライム・ロマンスではないが、Ashmole 写本中の他のロマンスはすべてテイル・ライム・ロマンスである。この写本を執筆・編纂したとされる Rate という名の写字生は、テイル・ライム・ロマンスの作風に慣れ親しんでいたはずで、このロマンスにも、Auchinleck 写本の版などには見られないそういった作風を持ち込んでいた、というのが私の仮説である。その作風とは、つまり、先程ブレトン・レイを扱った拙稿の紹介で述べたような特質である。この仮説は大筋では間違っていないと信じるが、根拠とした事実が提供する情報はやや微弱にすぎるかもしれない。

執筆順は前後するが、1993年論文は、「ユースタス・コンスタンス・フローレンス・グリゼルダ伝説」と、日本の中世から近世にかけての語り物、説経とを比較したものである。どちらも「貴種流離譚」というべき作品群であるが、なかなか興味深い類似性がある。文体の面では、定型句の繰り返しや語り手による教訓的締めくくり、内容の面においては、「申し子」、「父の怒りを買い、海に流される姫」、「近親相姦(未遂)」、「人を助ける動物」、「因果

応報」などのモティーフが両者に共通する。また、ロマンスと説経にともに見られる印象的な人物像として、気丈かつ実際的智略に富んだ女性の存在があげられる。さらに流離の貴種が一種の境界的状況に身を置くことが多いことも共通点である。もちろん、両者に共通した源があるという訳ではなく、人類の集合的無意識とでもいうべきものが、これらの東西の語り物文学にそれぞれ現出したと見るべきであろう。ただ拙論では、近似性を強調するあまり、両者を民衆的文学という範疇に無理やり押し込もうとしたきらいがある。テイル・ライム・ロマンスは、確かに一部のカプレット型式のロマンスや頭韻ロマンスに比べれば民衆的と言えるかも知れないが、それらの写本を所有していたのは前述の通り新興のアッパー・ミドルの市民であり、その聴衆・読者の層は想像以上に厚そうである。ひるがえって説経は、「賤民」文学というレッテルを貼られてきたし、事実、説経者にはほとんど乞食のような人が少なくなかったと言われる。聴衆も、どちらかと言えば下層の庶民であったようだ。説経、古浄瑠璃研究の第一人者である室木弥太郎氏は、その著書(1981)の中で「説経には物乞いのようなしつこさがある。子供のおねだりのように縛りつくものがある」(p.292)と述べている。テイル・ライム・ロマンスにも、ある種の哀調はあるけれども、もう少し乾いた味わいである。ロマンスとの比較はさておくとして、この説経というジャンルは日本人が誇つてよい本当の民衆文学であり、いつの日か何とか海外に紹介する手だけはないものかと考えている。

3.

前節においては脱線をまじえながらテイル・ライム・ロマンスを中心としたロマンス研究の内外の動向を追ってきた。ここでは、ロマンス研究の必要性、今後の方向などを改めて考えてみたい。

Trounceの努力にもかかわらず、テイル・ライム・ロマンスが英文学史上、等閑に付されてきたことはまぎれもない事実である。その理由は結局、数を頼んでみても、「これは」という名作が存在しないからにほかならない。チ

ヨーサー、*Sir Gawain and the Green Kngiht* など中英語文学の白眉は言うまでもないが、カプレット型式で書かれたロマンスにも *Sir Orfeo* という佳品がある。ひるがえってティル・ライム・ロマンスでは、*Amis and Amiloun* や *Sir Launfal* などが比較的よく鑑賞、研究されてきたといえるが、劣勢は覆うべくもない。結局、ティル・ライム・ロマンスはカプレット・ロマンスの一亜流として扱われてきたようなところがある。そもそも詩型にこだわって、ああだこうだと言うこと自体おかしい、という考え方もある。Wangはその学位論文(1993)の中で、‘...classification of the texts into airtight categories of metrical forms only provides a partial and lopsided view of Middle English narrative poetry’ (p.39) と喝破している。これは一理あるけれどもやや一方的で、前節で触れたPearsallの言説も思い出したい。「ティル・ライム・ロマンスという東ミッドランド地方を中心に隆盛した一群のルースな結びつきのユニティーがあり、その詩型のせいもあって、反復や常套句の多い民衆的語り物の様相を呈する。それらの中には『ユースタス・コンスタンス・フローレンス・グリゼルダ伝説』や、ブレトン・レイもどきの哀調溢れる教化的作品が含まれる。しかし、総じて、例えば *Gawain*などを読んで目の肥えた読者の審美眼を満足させるような作品はない」というのが大方の研究者の見方であろう。

ティル・ライム・ロマンスのトーンは本質的にシリアルスだと言える。遊び心といったものはない。よく話題になるチョーサー作品のキーワード、ernestとgameの対比でいうなら、間違いなくernestの世界である。全般的に野暮ったく、素朴で、表現や人物描写などは定型化している。それでいて派手なスペクタクルを好むようなところもあり、なかには突拍子もない展開に現代人の失笑を買うような場合もある。(この点で、*Sir Cleges*の夫婦愛を切々と描いたような場面は、現代人にもアピールしうる例外的事例と思うのだが、いかがだらう。)このような特徴は同時代のチョーサーによって見事に戯画化された。言わざと知れた ‘The Tale of Sir Thopas’ である。これについては拙稿(1997)で触れたので深入りしないが、一つだけ繰り返して述べておくと、

「トパス」を語るのはチョーサー自身である、という事実を忘れてはならない。チョーサーは当時流行のテイル・ライム・ロマンスだけをパロディ化しただけではなく、自身をもカリカチュアの対象としたのである。チョーサーのすごさであり、近代的側面である。話を元に戻す。テイル・ライム・ロマンスの「魅力」を逆説的な観点から探すとすれば、それはまさにその欠点ともいるべき常套句、冗長性、月並みなプロットにこそ見出されるべきかもしれない。それは落語や講談の「お定まり」を楽しむ態度に似ていなくもない。そのような「魅力」を楽しめない人はロマンスを鑑賞するには不向きだと言わねばならない。先に触れたKaneの研究などは、貴重な貢献ではあるが、果して彼がロマンスを楽しみえたかどうかは疑問とせざるをえない。

中世英國にテイル・ライム・ロマンスという、凡作にもせよ、当時は明らかに人気があった一群の作品が存在する以上、中世英國を知るためには、これらは読まれ、研究される価値がある。数百年後、20世紀の日本を研究する人の中には、川端康成や大江健三郎らのキャノンだけではなく、歌謡曲やボルノなどの大衆文化に目を向ける者も多いだろうし、それは大変自然なことである。それと同じ道理である。また、私は今まで、作品群という言い回しを幾度か使ってきた。それは、チョーサーのような、いわば個を確立した作者が中世では比較的異例であり、無名の作者群の手になる共同作とも言うべき作品群の流通というのが常態であったと思うからである。無名氏のロマンスといえども、もちろん一つの作品として鑑賞してもよいわけだが、同時に、その背後に控える均質のロマンス群、類話群、ロマンスを取り囲むように並べられた同一写本中の作品群というコンテクストを無視することはできないのである。さらに言うと、チョーサーのような一部の天才の作ですら、これらの作品群から切り離すことができない、というのが厨川氏らが指摘してきたことである。天才の秀作と凡百の作品群も、畢竟、対立するものではなく、延長線上にある。延長線と言って悪ければ、山の頂と裾野のような関係である。日本の歌舞伎や文楽などの、今日では高度に洗練された舞台芸術だって、それこそ説経のような「裾野」の作品群から滋養を吸い上げてきた産物であ

ることは、よく人も知るところである。

さらにもう一点。昨今のケルト・ブームや衰えを知らぬアーサー王伝説人気の影響もあってか、イングランド南西部やアイルランドにはわりと人々の関心が行くようである。しかし、これらとは殆ど無縁のイングランド東部への注目度は低いよう思う。(どうでもいいことだが、巷の旅行ガイドブックでも東ミッドランド地方はケンブリッジなどを除いて処女地となっている。イギリス人にとっても、東イングランドの低地帯はなんとなく退屈な所というイメージがあるらしい。)人口動態の観点から言っても、その後のロンドンの文明・文化の大きいなる供給源となった、この地方の中世文化にも今少し目配りが欲しいところである。

最後に、テイル・ライム・ロマンス研究の今後の課題を列挙して本稿を終えたい。この中には実現そうな課題、すでにある程度研究が進んでいる課題もあるが、完全には解答不能と思われることがらもある。「わかつたらいいのにな」という程度のものも含まれることを、ご承知いただきたい。

- (1) どのような経緯でテイル・ライム・スタンザ型式がロマンスに適用されるようになったのか。もっとも、この型式は聖者伝などにも使われているので、ロマンスというよりnarrativeと置き換えた方がよいかもしれない。
- (2) 脚韻語、テイル・ライン、コメント・クローズ(「この悪者に災いあれ」といった作者の思い入れの挿入)の分析。また、その作品間の比較。
- (3) Oral composition, oral transmission、ミンストレルの関与はどれくらいあったのか。これには口誦定型理論の部分的応用も考えられるだろう。(以上三点は、主に文体の問題である。)
- (4) 他のスタイルのロマンス、特に八音節対句(カプレット)型式のロマンスとの主題の面での比較。Trounce やPearsall (1965) の言説の検証。これは、テイル・ライム・ロマンスというジャンルを、いわばひとかたまりのユニティーとしてとらえることの是非に関わってくる。

- (5) 類話間の比較。これにはティル・ライム・ロマンスとそうでないロマンスとの間の比較(例えば *Sir Launfal* と *Sir Landevale*、*Ipomadon* と *The Lyfe of Ipomydon*)、ティル・ライム・ロマンス間の比較(例えば *Sir Eglamour of Artois* と *Sir Torrent of Portyngale*)の両方が考えられる。
- (6) ティル・ライム・ロマンスの前期と後期の作品群の傾向の比較。写本で言えば、Auchinleck MS と、他の15世紀の写本に収められた作品を比較検討することが考えられるだろう。
- (7) ティル・ライム・ロマンスに登場する印象的な女性像のさらなる解明。これには最近のフェミニズム批評的な観点、Osbornの著書に見られるような先史時代にまでそのプロトタイプを追い求める神話学的、民族(俗)学的アプローチなどが考えられる。後者は、(女性論に限ったものではないが) Speirs (1957) の学風にその萌芽が見られるが、彼の研究姿勢は Robbins (1967) によってこっぴどく批判された。
- (8) チョーサーとティル・ライム・ロマンスの関係のさらなる考察。‘The Tale of Sir Thopas’の魅力はまだまだ研究の余地があるようと思われる。
- (9) ロマンスが収められた写本の環境、いわゆるマニュスクリプト・コンテクストの研究の深化。これは、近年、英国の研究者が精力的に行ってきたところである。
- (10) ティル・ライム・ロマンスと、それが隆盛した東ミッドランド地方の演劇、聖者伝、視覚芸術などとのインターアクションの研究。
- (11) 聴衆・読者をめぐる研究。彼らはどのようなクラスに属する人々であったのか。当時の新興市民層についての社会史的研究や、マニュスクリプト・コンテクストの調査がこれを支えることになる。((9)、(10)、(11)はロマンスをとりまくコンテクストの研究と総称しうる。)
- (12) 日本の語り物文学、例えば説経、などとの比較文学的研究。
- (13) ティル・ライム・ロマンスを含む多くのロマンス作品の邦訳・紹介。先に述べたように、ロマンスのようなジャンル(特に一般に凡作と考えているようなもの)は作品群として読まれることが重要である。その意味で、

中英語ロマンス覚書—テイル・ライム・ロマンスを中心として—

手前味噌になるが、中世英國ロマンス研究会が続けてきた作業は貴重であると思うし、今後も継続していくべきだろう。

And þus endyþ þys romance gode
Jhesu that boght vs on the rode
Vnto hys blysse vs send
(*Le Bone Florence of Rome*, ll.2185-87)

参 考 文 献

- Adams, Tracy. 'Printing and the Transformation of the Middle English Romance.' *Neophilologus* 82 (1998): 291-310.
- Amadio, Mark C., ed. *Oral Poetics in Middle English Poetry*. (Albert Bates Lord Studies in Oral Tradition 13) New York & London: Garland, 1994.
- Andersen, David Michael. 'An Edition of the Middle English *Ipomadon*.' Diss. U of California, Davis, 1968.
- 安東伸介・他・編.『厨川文夫著作集』全二巻.東京:金星堂, 1981.
- Baugh, Albert C. 'Improvisation in the Middle English Romance.' *Proceedings of the American Philosophical Society* 103 (1959): 418-54.
- . 'The Middle English Romance: Some Questions of Creation, Presentation, and Preservation.' *Speculum* 42 (1967): 1-31.
- Bliss, A.J. 'Thomas Chestre: A Speculation.' *Litera* 5 (1958): 1-6.
- , ed. *Thomas Chestre: Sir Launfal*. London: Nelson, 1960.
- Brewer, D.S. & A.E.B. Owen, intr. *The Thornton Manuscript (Lincoln Cathedral MS. 91)*. London: Scolar P, 1977.
- 中世英國ロマンス研究会・訳.『中世英國ロマンス集』 東京:篠崎書林,1983.
- ・訳.『中世英國ロマンス集・第二集』 東京:篠崎書林,1986.

- ・訳. 『中世英國ロマンス集・第三集』 東京:篠崎書林,1993.
- Dunlap, A. R. 'The Vocabulary of the ME Romances in Tail-Rhyme Stanza.' *Delaware Notes* 14 (1941): 1-42.
- Dürmüller, Urs. *Narrative Possibilities of the Tail-Rime Romance*. Bern: Francke Verlag, 1975.
- Fein, Sasanna Greer. 'Twelve-Line Stanza Forms in Middle English and the Date of *Pearl*.' *Speculum* 72 (1997): 367-98.
- Fewster, Carol. *Traditionality and Genre in Middle English Romance*. Cambridge: D. S. Brewer, 1987.
- Guddat-Figge, Gisela. *Catalogue of Manuscripts Containing Middle English Romances*. Munich: Wilhelm Fink, 1976.
- Hibbard, Laura A. *Mediaeval Romance in England: A Study of the Sources and Analogues of the Non-Cyclic Metrical Romances*. New York: OUP, 1924.
- Hilligoss, Susan Jane. 'Conventional Style in Middle English Tail-Rhyme Romance.' Diss. U of Pennsylvania, 1977.
- Hudson, Harriet. 'Middle English Popular Romances: The Manuscript Evidence.' *Manuscripta* 28 (1984): 67-78.
- 池上忠弘. 『ガウェインとアーサー王伝説』 東京:秀文インターナショナル, 1988.
- 岩崎春雄. 「チョーサーとティル・ライム・ロマンス」『芸文研究』(慶應義塾大学英文学会) 20 (1965): 177-89.
- Kane, George. *Middle English Literature: A Critical Study of the Romances, the Religious Lyrics, Piers Plowman*. London: Methuen, 1951.
- Loomis, Laura Hibbard. 'Chaucer and the Auchinleck MS: "Thopas" and "Guy of Warwick".' *Essays and Studies in Honor of Carleton Brown*. New York: New York UP, 1940. 111-28.
- . 'The Auchinleck Manuscript and a Possible London Bookshop of 1330-1340.' *PMLA* 57 (1942): 595-627.
- McSparran, Frances & P. R. Robinson, intr. *Cambridge University Library MS Ff.2.38*.

- London: Scolar P, 1979.
- Mills, Maldwyn, ed. *Six Middle English Romances*. London: Dent, 1973.
- _____. Review of Urs Dürmüller, *Narrative Possibilities of the Tail-Rime Romance* (Bern, 1975). *Medium Ævum* 47 (1978): 152-56.
- _____. (recording) *Horn Childe*. Adelaide: The Chaucer Studio, 1990.
- _____. 'Sir Isumbras and the Styles of the Tail-rhyme Romance.' *Readings in Medieval English Romance*. Ed. Carol M. Meale. Cambridge: D.S. Brewer, 1994. 1-24.
- 室木弥太郎. 『増訂・語り物(舞・説経・古淨瑠璃)の研究』 東京:風間書房, 1981.
- Osborn, Marijane. *Romancing the Goddess: Three Middle English Romances about Women*. Urbana & Chicago: U of Illinois P, 1998.
- Pearsall, Derek. 'The Development of Middle English Romance.' *Mediaeval Studies* 27 (1965): 91-116.
- _____. *Old English and Middle English Poetry*. (The Routledge History of English Poetry 1) London: RKP, 1977.
- _____. 'Middle English Romance and its Audiences.' *Historical & Editorial Studies in Medieval & Early Modern English for Johan Gerritsen*. Ed. Mary-Jo Arn, et al. Groningen: Wolters-Noordhoff, 1985. 37-47.
- Pearsall, Derek & I.C. Cunningham, intr. *The Auchinleck Manuscript: National Library of Scotland Advocates' MS. 19.2.1*. London: Scolar, 1977.
- Reichl, Karl. 'The Middle English Popular Romance: Minstrel versus Hack Writer.' *The Ballad and Oral Literature*. Ed. Joseph Harris. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1991. 243-68.
- Reichl, Karl & Walter Sauer. *A Concordance to Six Middle English Tail-Rhyme Romances*. 2 vols. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1993.
- Rice, Joanne A. *Middle English Romance: An Annotated Bibliography, 1955-1985*. New York: Garland, 1987.
- Robbins, Rossell Hope. 'Middle English Misunderstood: Mr. Speirs and the Goblins.' *Anglia* 85 (1967): 270-81.

- Saito, Toshio & Mitsunori Imai. *A Concordance to Middle English Metrical Romances*. 2 vols. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1988.
- Severs, J. Burke, gen. ed. *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*. Fascicule 1. Romances. New Haven: The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 1967.
- Shimogasa, Tokuji. 'Rhyme Phrases in Tail-Rhyme Romances.' *Language and Style in English Literature: Essays in Honour of Michio Masui*. Ed. Michio Kawai. Tokyo: Eihosha, 1991. 227-49.
- Simons, John. 'Northern Octavian and the Question of Class.' *Romance in Medieval England*. Ed. Maldwyn Mills, et al. Cambridge: D.S. Brewer, 1991. 105-11.
- Spearing, A. C. 'Marie de France and Her Middle English Adapters.' *Studies in the Age of Chaucer* 12 (1990): 117-56.
- Speirs, John. *Medieval English Poetry: The Non-Chaucerian Tradition*. London: Faber and Faber, 1957.
- Strong, Caroline. 'History and Relations of the Tail-Rhyme Strophe in Latin, French, and English.' *PMLA* 22 (1907): 371-420.
- Tajiri, Masaji. '“The Heroine on the Beach” in *Emaré*.' 『海技大学校研究報告』 30 (1987): 67-85.
- . '“The sone rase bryght and schane”—the Theme of the Hero on the Beach in Middle English Tail-Rhyme Romances.' 『大阪外国语大学論集』 ns. 6 (1991): 195-218.
- . 'How pitiful the lady was!—Some Common Features of English and Japanese Traditional Narratives.' 『英語圏世界の総合的研究』 箕面: 大阪外国语大学, 1993. 43-61.
- . 'Middle English “Breton Lays”—Two Traditions.' 『SENTENTIAE—水鳥喜喬教授還暦記念論文集』 菊池清明、他・編. 京都: 北斗出版, 1995. 267-77.
- . '“So well y schall the saue”—A Study of the ME Tail-Rhyme “Breton Lays”.' 『大阪外大 英米研究』 20 (1995): 139-66.
- 田尻雅士. 「ジェフリー・チョーサー:イギリス的ユーモアのはじまり」 『イギリス

中英語ロマンス覚書—テイル・ライム・ロマンスを中心として—

研究の動向と課題』 箋面:大阪外国语大学,1997.3-21.

Tajiri, Masaji. 'The Hero as (Anti)christ in *Sir Gowther*: The Influence of the Apocryphal Gospels Reconsidered.' 『大阪外国语大学論集』 ns. 19 (1998): 127-41.

———. 'Romance, Wall Paintings and Vault Bosses: *Le Bone Florence of Rome* in Context.' (forthcoming)

———. 'Sir Orfeo in MS Ashmole 61: One Foot in the Tail-rhyme World?' (forthcoming)

Taylor, George. 'Notes on Athelston.' *Leeds Studies in English* 4 (1935): 47-57.

Trounce, A. McL. 'The English Tail-Rhyme Romances.' *Medium Ævum* 1 (1932): 87-108, 168-82; 2 (1933): 34-57, 189-98; 3 (1934): 30-50.

———. *Athelston: A Middle English Romance*. (Philological Society Publication 11) London: OUP, 1933.

Vandelinde, Henry Lloyd. 'THE PRODIGAL ONES The Middle English Hagiographical Romances: Genre Identity and Critical Evaluation.' Diss. Queen's U, Canada, 1995.

Wang, Denise Ming-Yueh. 'Generic Problems in Middle English Romance: A Jaussian/Bakhtinian Study.' Diss. Michigan State U, 1993.

